

平成 28 年度  
吉野町緑地周辺整備推進事業  
実施報告書  
(概要版)

主催：弘前市  
企画・運営：特定非営利活動法人 harappa

## 1. 「平成 28 年度 吉野町緑地周辺整備推進事業」について

本事業は、中心市街地における交流人口の増加、回遊性の向上による賑わいの創出に資する取組として、吉野町煉瓦倉庫を活用した参加型のイベントを行うことで、2020年に予定している美術館を核とした文化交流拠点施設開設に向けた気運の醸成と情報の発信を図ったものである。

平成 28 年度の本事業では、煉瓦倉庫での公演の観覧やワークショップ等を通し、アートの楽しさに触れ、参加者がアートに興味を持つ、または関心を深めるきっかけとし、将来的に煉瓦倉庫が改修されて美術館を核とした文化交流拠点になることを参加者が実感できるように取組を行った。

## 2. れんが倉庫こども写生会

### (i) 開催概要

小学生を対象に、美術館を核とした文化交流拠点へと生まれ変わる煉瓦倉庫を題材にして、吉野町緑地にて写生会を行った。子どもたちの煉瓦倉庫への興味・関心を広げ、煉瓦倉庫との思い出を作ってもらうことを目的とし、煉瓦倉庫をテーマに自由に絵を描いてもらった。また、写生会の前には、倉庫の歴史や本市出身のアーティスト・奈良美智氏、《A to Z Memorial Dog》についての話をするすることで、理解を深めた。サポートスタッフとして、弘前大学の美術講座の学生に手伝ってもらった。

開催日時/場所：2016年8月9日（火）13時00分～17時00分/土淵川吉野町緑地

定員：20名

参加者：21名

スタッフ：事務局3名、弘前大学美術講座学生3名、弘前大学大学院学生1名

参加費：無料

### (ii) レポート

夏休み中の開催ということもあり、夏休みの宿題として写生会に参加する子どもたちが多く、参加人数は小学校1年生から5年生までの計21名で、保護者や兄弟・姉妹で見学に来てくれる方も多かった。事務局から、煉瓦倉庫や《A to Z Memorial Dog》についての説明を行ったあと、子どもたちは思い思いの場所で写生を行った。サポートスタッフとして弘前大学美術講座の学生たちにも手伝ってもらい、子どもたちへの声かけや助言を行ってもらった。写生終了後は、完成した絵をみんなで発表し合い、記念撮影を行った。煉瓦倉庫全体を描いた子どもや、一部をアップにして描いた子、《A to Z Memorial Dog》を描いた子など、選んだ題材や構図、色づかいに子どもたちの個性が見てとれる自由な作品の数々が完成した。参加してくれた子どもたちにとって、煉瓦倉庫で過ごした夏の思い出として記憶に残ってくれればと感じた。



### 3. 光と音のサーカス 弘前公演&ワークショップ

#### (i) 開催概要

美術館を核とした文化交流拠点開館前のイベントとして「光と音のサーカス 弘前公演」を開催した。公演内容は、物語音楽家・CINEMA dub MONKS（曾我大穂氏・ガンジー西垣氏）、照明作家・渡辺敬之氏、現代美術作家・小沢健人氏、裁縫師・スズキタカユキ氏による即興アートパフォーマンスである。弘前公演ならではの取組として、ゲスト出演者の現代美術家・小沢健人氏を迎え、この弘前公演でしか観られない特別な1日限りの公演となった。音楽、映像、照明等の様々な要素が混ざり合った効果的な演出により、空間の魅力が引き出され、吉野町煉瓦倉庫ならではの幻想的な空間をつくり出すことに成功した。

また、「光と音のサーカス ワークショップ」と題して、公演の前日に舞台装飾ワークショップを開催した。小学生から大人まで楽しめる参加型のワークショップで、「光と音のサーカス」公演の象徴である白い布を裂いたり、巻いたりしながら、舞台装飾を参加者とともに作り上げた。さらに、本公演で使う照明や光の仕掛けを音楽演奏と一緒に操作する場を設け、参加者がアートに興味を持つきっかけとし、弘前の未来を担う若者の育成と、子どもたちの感性を磨く体験として実施した。

#### 【光と音のサーカス ワークショップ】

開催日時/場所：2016年8月20日（土）14時～15時30分/吉野町煉瓦倉庫

参加費：無料

参加人数：22名

当日スタッフ：6名

#### 【光と音のサーカス 弘前公演】

開催日時/場所：2016年8月21日（日）会場 13時30分、開演 14時/吉野町煉瓦倉庫

参加費：無料

来場者数：276名

当日スタッフ：10名

#### (ii) 出演者

- ・CINEMA dub MONKS（物語音楽家）
- ・渡辺敬之（照明作家）
- ・小金沢健人（現代美術家）
- ・スズキタカユキ（裁縫師）

#### (iii) レポート

#### 【光と音のサーカス ワークショップ】

当日の参加者は22名、講師は21日の出演者でもあるCINEMA dub MONKSの曾我大穂氏、ガンジー西垣氏、照明作家の渡辺敬之氏で開催され、参加者の約半数は未就学児や小学生で、親子での参加も多かった。白い布を手で切り裂いて三角形にして、そこにそれぞれ好きな絵や文字を描き、旗を作った。参加者全員で作った旗を繋げ、21日の公演で使う舞台装飾を完成させた。旗づくりが終わると、照明操作の体験を行った。実際の舞台を用いて、照明操作の体験を楽しむ参加者の様子が印象的だった。また、翌日の公演の際に自分たちが作った旗がどのように装飾されるのか楽しみにしていた。様子だった。公演を観る“お客さん”としてだけではなく、ステージの“作り手”としても参加できる貴重な機会になったのではないかと感じた。



#### 【光と音のサーカス 弘前公演】

ワークショップ翌日に開催された「光と音のサーカス 弘前公演」では276名もの来場者を記録した。たくさん白い布で装飾された会場は、普段使用されることのない煉瓦倉庫が放つ厳粛な雰囲気と混じり合い、唯一無二の特異な空間と化していた。開演前の時間から、久々に煉瓦倉庫に入る人、初めて入る人それ

それが、煉瓦倉庫と会場の雰囲気を楽しんでいた。公演が始まると、CINEMA dub MONKS の物語を紡ぐような音楽と、その音楽の一瞬一瞬を捉え、光を創り出す照明家の渡辺敬之氏、怪しくも美しい世界を映し出す現代美術家の小金沢健人氏による即興アートパフォーマンスが、集まった来場者を魅了した。公演の後半には、シークレットゲストの裁縫師・スズキタカユキ氏が登場し、幻想的な世界をより一層深め、次から次へと変化するステージに観客の視線が釘付けになっていた。煉瓦倉庫改修前の貴重なプレイベントということで興味を持ったお客さんも多いと思うが、アートとしても質の高いパフォーマンスを提供でき、この公演により、アートとの結びつきの中で発揮されていく煉瓦倉庫の空間のポテンシャル、今後ここで展開されるであろう文化的アクティビティのイメージを市民により一層印象づけるものとなったと思う。



#### (iv) 参加者アンケート (抜粋)

- ・倉庫がうれしがって一緒に参加しているようでした。(県外・40代・女性)
- ・こんな素晴らしい光と音に、思わず目をうばわれました！(市内・10代・女性)
- ・普段入れないレンガ倉庫とのイベントということで新鮮で楽しめた。(市内・20代・女性)
- ・無料のイベントなのに、とてもクオリティが高くてビックリしました！！(市内・30代・女性)
- ・空間のみせかたがとてもよかった。布が変化するのがよかった。(市内・30代・女性)
- ・どっぷりと空間にひたれました。観客というより、出演者の一部になったよう。(市内・60代・女性)
- ・とてもおもしろかったです。演奏もちろんですが、布を切る音がこちよかったです。(市内・20代・女性)
- ・倉庫の空間とマッチしていて良かった。(県外・50代・男性)
- ・建物とよく調和していた。(県内・30代・不明)
- ・れんが倉庫を活かした、このようなイベントを継続的に行ってほしい。(市内・40代・男性)
- ・感動しました。また2回目、3回目があるといいです。(市内・40代・女性)
- ・必ずまた光と音のサーカスイベントをやってほしいです。(市内・30代・女性)

## 4. 煉瓦倉庫見学会

### (i) 開催概要

8月21日の「光と音のサーカス 弘前公演」の開催に合わせ、煉瓦倉庫見学会を実施した。過去の吉野町煉瓦倉庫での奈良美智展に関わったスタッフをガイドとした見学ツアーを行うとともに、吉野町煉瓦倉庫の歴史を記した年表、「朝日シールド」を生産していた頃の様子、過去3度にわたって開催された奈良美智の展示風景等をパネル展示し、文化交流施設としての吉野町煉瓦倉庫の気運を高めることを目的として実施した。

開催日時/場所：

2016年8月21日 ①13時～②16時～/吉野町煉瓦倉庫

参加者：各回25名 計50名

参加費：無料

(ii) レポート

普段は立ち入りできない煉瓦倉庫に興味を持った市民が多く参加した。スタッフの説明を受けながら、煉瓦倉庫を隈なく探索し、改修前の貴重な体験を味わっていた。当日になっても参加希望の方が多くいらっしや、「今回は参加できなかったのでまた見学会を開催してほしい」という声が多く寄せられた。事務局としても開催日の増加やスタッフの増員等、計画の段階でさらに検討が必要であったと感じた。弘前市民にはそれぞれの煉瓦倉庫の思い出があるのだということを改めて認識できた。



## 5. 吉野町煉瓦倉庫リサーチ

(i) 開催概要

煉瓦倉庫のこれまでの歴史や現在の姿を後世に伝えていくために、煉瓦倉庫の内部空間および外部空間を写真等で記録し、関係者へのヒアリング等を行い、建設から現在に至るまでの経緯等を年表や写真等でまとめた。この煉瓦倉庫はかつて東北最大の酒造工場としての規模を誇り、戦後日本で初めてシードルが製造された場所でもあり、そして2000年代には奈良美智氏の展覧会が3度にわたって開催されたことも多くの市民が記憶している。しかしそれぞれの時代で、倉庫内部において様々な出来事が繰り広げられながらも、いかにしてその空間が使用され、またどのような人物が関わっていたのか、明らかにされていない部分や記録が残されていない部分も多くある。煉瓦倉庫の過去の事実について調査し、また現在の姿を記録していくことは、将来この地に誕生する芸術文化施設で展開される様々な活動の根幹を支えるものとして位置づけられる。

(ii) 実施スケジュール

- 8月下旬～ 新聞等の資料リサーチ
- 10月12日 ニッカウキスキー弘前工場総務部部長 ヒアリング
- 10月14日 元・煉瓦館再生の会 事務局ヒアリング
- 10月17日 煉瓦倉庫写真撮影
- 10月19日 古朝日シードル株式会社元社員ヒアリング
- 10月26日 煉瓦倉庫現地調査、追加写真撮影

(iii) 調査内容

「平成28年度 吉野町煉瓦倉庫リサーチ報告書」参照

(iv) レポート

吉野町煉瓦倉庫の1907年の建設から現在に至るまでの歴史を調べるということは、煉瓦倉庫を守ってきた人、大切に思ってきた人々の思いを読み解くということであり、煉瓦倉庫のこれからの存在意義や活用方法を考えるために必要な作業の一つであったように思う。

福嶋酒造株式会社の設立者である福島藤助氏に関する資料調査を始め、煉瓦倉庫に関する新聞記事の調査、当時の関係者へのヒアリング等を通し、煉瓦倉庫が現存していることが、弘前市及び弘前市民にとって如何に幸運で重要なことであるのかが再認識できた。今回の調査内容を弘前市民や将来を担う子どもたちと共有し、未来につなげていくことが今後の課題であると考えている。